



AEFA フレンド会報

アジア教育友好協会 Asian Education and Friendship Association (AEFA)

〒168-0071 東京都杉並区高井戸西2-14-49

電話 03(3506)7302 /FAX 03(3506)7301 Email: office@nippon-aefa.org

AEFAのフレンドシップ交流も1年が経過し、それぞれの交流が形になってきています。今号では、こうしたフレンドシップ交流の様子や2月に行われた各国NGOとのトップ会談、そしてラオスの学校建設等を紹介します。

生徒会で集めた募金で毛布と蚊帳などの寝具を寄付しました(豊田中)

静岡県磐田市立豊田中学校では、生徒会が中心となり、生徒たちが自ら進んでアジアの学校支援活動に取り組んでいます。10月に生徒会の行った募金活動では、4万円近いお金が集まりました。

フレンドシップ校のパチュドン小学校があるラオス南部山岳地帯には、学校と寮ができて、他のものは本当に何もないということを知り、そのお金をもって現地スタッフがタイで毛布と蚊帳を買って寄付しました。

AEFAスタッフがその時の様子を報告したところ、生徒たちからは「思った以上に大変なところだ」「日本では学校が嫌だ、など言っているけど日本の生活は夢のように恵まれている」「みんなで支援をしていきたい」という感想でした。

その後、新しい生徒会でも12月、1月に募金活動を行いました。真冬の寒い中、手がかじかむ思いで登校時間に全校生徒に呼びかけました。集まった3.7万円は、今後パチュドン小学校の支援に使われます。



パチュドン小に贈られた毛布と蚊帳



報告を受ける生徒会のメンバー

<フレンドシップ校紹介> ラオス・パチュドン小学校

ラオス南部山岳地帯にあるパチュドン小学校では、これまで貧困の問題や教育に対する意識の低さ、また遠方の村から学校に通うのに数kmかかるなど通学の大変さから、就学率は40%程度でした。そのため、生徒の中には小学校とはいえ17歳の青年もいました。AEFAでは2005年にここパチュドン村に小学校を建設しました。

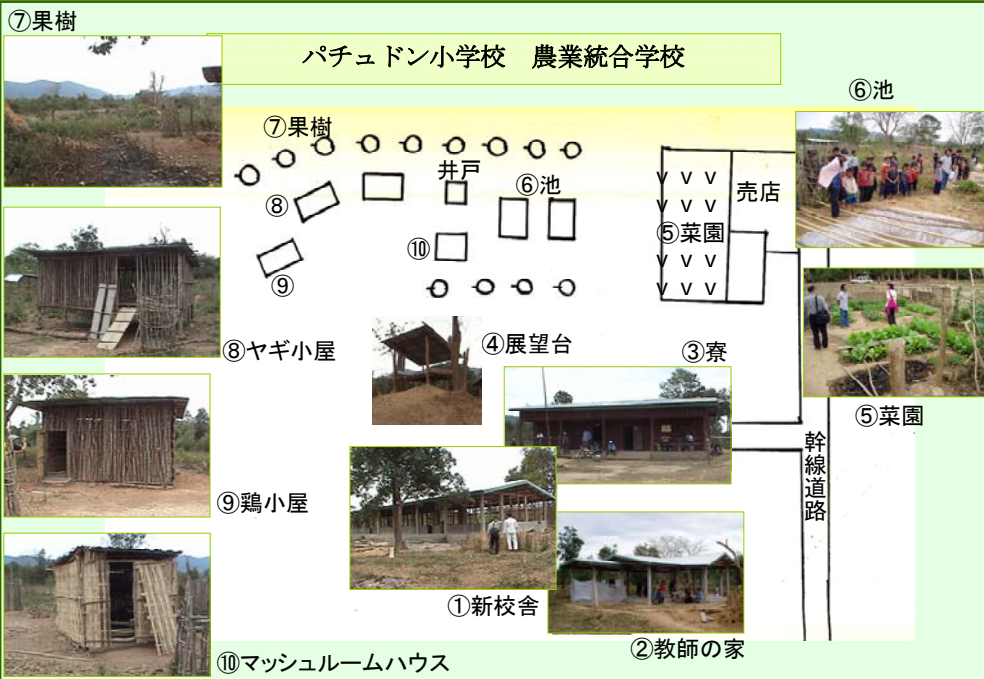
新校舎の建設にあたっては、村人たちが木を切り出して資材を提供したり、共に建設作業に携わるなど、積極的な協力がありました。子どもたちも完成前から学校に集まってきており、学校建設を通して村の団結が高まり、教育への関心と期待が高まったようです。

また、寮の建設に伴い、遠方の村から子どもたちが安心して通えるようになりました。学校の敷地内には、学校菜園や鶏小屋・ヤギ小屋、養魚池、きのこ栽培小屋があり、「農業統合学校」として「統合農業教育プログラム」を行っています。

村人からも、農業を生徒たちに教えようと申し出る人や家畜を提供してくれる人があられ、子どもたちと村人が力を合わせてプログラムに取り組んでいます。

農園の栽培や家畜の飼育がうまくいけば、収穫を学校の給食に充てたり、売店で販売して現金収入を得ることもできます。

これらの活動を通して、ますます村人の教育への意識も高まると思われます。



フレンドシップ交流の紹介

巾着袋を作り、フリーマーケットで集めたお金で歯磨きセットを贈りました(横浜雙葉高)

横浜雙葉高校の2D組の生徒たちは、タイのソップワーク小学校の寮生が歯磨きセットを必要としているという話を聞き、12月の「奉仕の日」に手縫いで袋を作りました。その後も家で縫ってくる生徒もいて、合計200枚の巾着袋ができました。

秋の雙葉祭でのフリーマーケットの売上げで、歯ブラシ、歯磨き粉、石鹸、タオル、コップを現地のNGOスタッフが購入。ソップワーク小の子どもたちが、自分で1つつづつ巾着袋に歯磨きセットを入れて、受け取りました。



「奉仕の日」の巾着袋作り



歯磨きセットをもらって喜ぶ子どもたち

学校生活の様子を撮影した写真や、生徒たちの絵を送りました(上平沢小)

岩手県紫波町にある上平沢小学校には、フレンドシップ校のベトナム・ヴァンフォン小学校の子どもたちから絵が届きました。絵には学校で遊ぶ子どもたちの様子や、学校のまわりの自然も描かれていました。また、ベトナムをもっとよく知るために「ベトナムコーナー」を設けて、ベトナムの資料や民族の織物、竹の楽器などが展示されています。



上平沢小から送った写真



上平沢小学校からは、ベトナムには雪が降らないので、雪景色や雪遊びの様子を撮った写真、子どもたちが身のまわりの生活を描いた絵をヴァンフォン小へ送りました。

ベトナムコーナーにある資料



ヴァンフォン小から届いた絵



チェンマイ AEFA第1回トップ会談

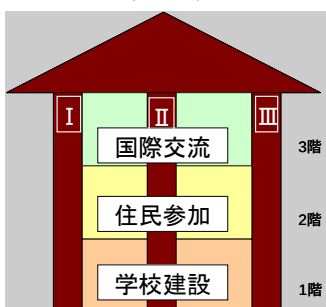
各国パートナーNGOのトップが集まり、活動報告と今年度の建設について国際会議が開催されました



出席者：左よりRick Reece (VFI)、斉藤（日本財団）、玉澤（日本財団）、谷川（AEFA）、Ca Van Tran (VNAH)、Udom Likhitwonnawut (RTF)

作るだけではない、住民参加による学校建設100校のプロジェクトを進め、現在60校建設されています。

斉藤：ミャンマーでの学校建設には村人に最大限協力してもらっています。労働奉仕分は村の基金に入れ、菜種の栽培、豚銀行、水力発電など自立支援活動を行い、学校の維持、運営費に充てています。これら自立支援活動からの収入は学校維持費、先生の給与補填、さらなる先生の雇用などに充てられます。



『3階建学校建設構想』

“日本財団の学校建設は、建物の建設から住民参加、そして国際交流へと発展してきました”

玉澤：日本財団は『国づくりは人づくり』の理念のもと、1998年から海外での学校建設を行ってきました。まずペルーで学校を50校建設、カンボジアで100校を作ってきました。その後ミャンマーでは、学校の建物を

谷川：日本財団はミャンマー方式をもう一歩進め、日本の学校が現地の学校と交流・支援するという新しい要素を加えました。これがAEFAの学校建設『3階建構想』です。1階は建物の建設、2階は村人の住民参加、3階は日本の学校が交流・支援するというものです。そしてこの学校は①先生・生徒・村人の情熱(Passion)、②村人・NGO・政府の活動(Action)、③日本財団やAEFA会員の会費などの資金(Donation)の3つの柱に支えられています。

各家庭に呼びかけて集めた文房具をラオス、タイ、ベトナムの学校に贈りました(平章小)

福井県坂井市立平章小学校では、各家庭に呼びかけ、鉛筆594本、色鉛筆241本、ノート40冊、消しゴム49個、筆入れ15個、定規45本、色紙、シャープペンシルなどたくさんの文房具を集めてくれました。

2月にAEFAスタッフがタイ、ラオス、ベトナムを訪問し、これらの文房具を届け、アジアの子どもたちに大変喜ばれました。

また、フレンドシップ校のベトナム・タンタイン小学校には、平章小の高学年児童から習字と俳句作品が贈られました。平章小学校は、2006年1月よりベトナム・イェンホップ小学校とのフレンドシップ交流も始まっています。



集まった文房具



ラオス・パチュドン小へ



ラオス・アワイ小へ



タイ・サムソップ小へ

生徒たち手作りの“竹炭”を「まちださくらまつり」にて販売、大盛況でした(小山田小)

町田市立小山田小学校では、生徒たち自身が学校の裏の竹を切って竹炭を作り、川の浄化に取り組むなど環境活動に力を入れています。

4月8、9日に町田市尾根緑道で開催された「まちださくらまつり」に出店し、竹炭(1袋5個入/100円)と竹酢液(350円)を販売しました。子どもたちも一生懸命に声をはりあげてお客様に呼びかけて、連日午前中には完売御礼の大盛況でした。この売り上げは、交流校である、タイ・サムソップ小学校に寄付する予定です。



ラオス VFI
代表 リック・リース

“少数民族の言語教育は、自分たちの文化である民族語と生きるための共通語をバランスよく学ぶ必要があります”

リック:ラオスの少数民族の子どもたちは、学校で共通語を学び、家庭に戻ると民族の言葉を使っています。しかし、ラ

オスの共通語であるラオ語がわからないと、商売でだまされ、生活面でも搾取されるという現実があります。生活をするためのラオ語は必要ですが、少数民族の文化、言葉を維持していくために、両者のバランスに常に注意を払わないといけません。

ウドム:タイのカレン族でも民族の文化を尊重し、誇りを持たせるような教育を子どもに行おうとしています。学校のカリキュラムの中でも共通語だけでなく、民族語も取り入れるようになっていきます。

今、子どもたちは国際社会で生きていくためには、共通語や民族語だけでなく、英語や日本語やその他の外国語も学ばなければなりません。

“このプロジェクトは地域住民、政府とのバランスがとても重要です”

トラン:NGOは政府が光をあてていない問題に目を向け、社会変化を起こす引き金になることを期待したいと思っています。

リック:お金だけを投入するプロジェクトは失敗します。住民の情熱を呼び起こせなかったり、住民に参加する機会を与えない場合には、そのプロジェクト地域の人々は関心をもたず、結局失敗に終わるのです。

大切なのは、プロジェクトに政府の関心をいかに得るか、地域住民、NGOをいかに引き込んでいくか、そして自分たちがいかに実行していくかということです。



タイ RTF
北タイ代表 ウドム・リキトナワット



ベトナム VNAH
代表 カバン・トラン

開校式が行われました

ベトナム イェンホップ小学校

2月17日、ベトナム・クアンビン省イェンホップ小学校で開校式が行われました。イェンホップ村はベトナム最後の少数民族「ルック族」の村です。狩猟中心の洞窟生活を営んできました。現在、政府から土地、住居が与えられ、農業指導、識字教育などが行われていますが、依然貧しいままの状況です。学校ができて勉強できる環境が整いました。



ラオス アワイ小学校

2月13日、ラオス・サラワン県アワイ小学校で村人あげての開校式が行われました。これまで、校舎としては村人手作りの小屋しかなかったのが、3教室と職員室の新校舎が完成しました。学校ができたことで先生が新たに1人派遣され、高学年まで授業が受けられるようになりました。周辺の村にも学校がないので、遠くからも通えるように寮も建設されました。将来的には80人ぐらいの子どもたちが勉強できるようになります。

また、学校には養鶏舎、養豚舎、学校菜園、養魚池、果樹も植えられ、統合農業学校となっています。



日本の掃除文化をアジアへ

日本の学校では毎日当たり前の習慣として子どもたちが掃除をしています。アジアでは子どもが掃除をしない国もあるという話を聞きました。このことは、掃除という、実は素晴らしい文化を私たちが持っていることを気付かせてくれる機会となりました。

AEFAでは、建てた学校をきれいに使ってもらいたいという思いから、日本の掃除文化を広める活動をしています。日本の子どもが掃除をしている姿をビデオ・写真で伝え、各国の言葉に翻訳したポスターを配り、開校式には掃除用具を届けています。



各国語の言葉に翻訳したポスター

現地で掃除道具を購入



子供たちが掃除する姿を報告

新フレンド会員紹介

新しく友の会に入会された皆さんです。
ご入会ありがとうございました。(敬称略)

〈個人会員〉 新関陽一・岡本重治・小島一雄・小島美穂子・星田啓子・大石孝裕・阿部豊・佐藤正昭・檜喜代志・矢嶋由衣・久保添紀・長島訓子・野頼徳治
〈法人会員〉 ㈱ニッケイ印刷・阪神トラベルインターナショナル(㈱)

＜AEFA友の会からお知らせ＞

☆会員のグローバルネットワークの芹澤さんが、AEFAを通してNTTコミュニケーションズの『プラチナライン』のサービスに入った場合、AEFA友の会へ寄付を回すよう配慮して頂いております。『プラチナライン』加入にご協力頂きました会員の皆様はこの場を借りてお礼申し上げます。また、『プラチナライン』加入に協力していただくとおられる方は、事務局までご連絡ください。

☆会員の渡辺ティ子さんから「ささやかな寄付ですが、ベトナムの子どもたちのために役立てて欲しい」との申し出がありました。ベトナム・イェンホップ小学校に現地で中国製のテレビを買い、開校式に贈呈しました。ご支援ありがとうございました。

☆会員の皆様のアイデアをAEFA事業に活かしていきたいと思っております。こんな学校を作ってもらいたい、こういう交流は面白いのでは、などアイデアがありましたら、どうぞ事務局までご意見をお寄せください。お待ちしております。

アジア教育友好協会 Asian Education and Friendship Association (AEFA)

本 部: 〒168-0071 東京都杉並区高井戸西2-14-49

連絡先: 〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-15-16 海洋船舶ビル8F 電話 03(3506)7302 /FAX 03(3506)7301

Email: office@nippon-aefta.org URL: http://www.nippon-aefta.org

【特集】 静岡英和女学院高校

タイ＜ボランティア・ツアー開催＞

ホームステイ・学校の活動・カレン族の文化に触れ、タイを体験しました

3月7日から14日の日程で、静岡英和女学院高校の生徒さんと先生の総勢20名が、ファイヤー小中学校・ポカロン小学校を訪れ、ボランティア・ツアーが開催されました。この2校はAEFA2006年度の建設校で、建設前からの交流が始まっています。

生徒さんたちは、タイの子どもたちとさまざまな活動を共にし、交換授業も行い、交流を深め、お互いの文化を体験し合いました。また、ホームステイを通じて、村の人の生活に実際に触れることもできました。

帰国後、生徒さんたちがまとめた今回の交流についての体験作文からは、現在の自分たち自身や、とりまく社会、自然環境のこと、そしてこれからのことについて改めて考える契機となる、とてもすばらしい経験だったのではないかと、強く感じられます。



<日程表>

3/7	静岡→バンコク国際空港(チェンマイ泊)
3/8	メーチェム郡ジャムルワン地区へ車でガタガタ道を移動すること6,7時間(ホームステイ)
3/9	村の学校に登校。森での活動など(ホームステイ)
3/10	英和生による特別授業・村の文化体験(ホームステイ)
3/11	ビーバーダム作り・water power mill見学 夜:お別れ交流会 (ホームステイ)
3/12	朝:教会にて礼拝 現地エイズ事業見学
3/13	チェンマイ市内観光 帰国
3/14	

生徒さんたちの体験作文集より



英和生による特別授業

友人がガイドさんに「子どもたちの夢って何だろう」と質問したときに、ガイドさんがこう答えました。「『夢がわからない』って言うの」この一言に、その場にいた私たち3人は絶句してしまいました。こんなに礼儀正しくて、しっかりしている子に夢がないなんて…と。ただショックでした。ガイドさんの説明では、子どもたちは、この村の中のことしか知らなくて、先生以外の職業を知らないということでした。子どもたちの視野をもっと広くしてあげられたいものという気持ちばかり心に積もりました。(杉山 亜美)



みんな礼儀正しい子どもたち

村にいる間、私は本当に幸せだったのです。帰ってきてから友人と、「村にいたときが一番笑っていたよね。」という会話をしたほどです。村全体が家族のようになって私たちを温かく迎え入れてくれ、学校に行けば、子どもたちが照れつつも笑顔を向けてくれました。三日目の夜は村の人たちと意見交換をする機会が与えられ、彼らはこんなことを言ってくれました。「みんなのことを、娘のように愛を持って受け入れているつもりだけれど、食事が合わなかったり、不便な思いをさせていたらごめんなさい。」と。貴重な水を使いすぎたり、食べ物を残してしまったり、迷惑をかけてばかりなのは私たちの方でした。充分すぎるほどのおもてなしや思いやりに、感謝の気持ちも伝えきれない自分をくやしく思います。

(中野 瞳子)



薬草の木の学習

村の人達はいつも、「来てくれてありがとう」という言葉を口にしていました。私は行っただけで感謝されたのは初めてでした。本当に心から迎え入れてくれる人々の温かさが伝わってきました。あんなに温かい人達ばかりの環境から、今の日本の現状を見たらどのように感じるのでしょうか。例えば私たちが東京に行った時に人が冷たいと感じることがあります。そのショックよりはるかに大きなカルチャーショックを感じることでしょう。いつも私たちのことを心配してくれた村の人々が、いつか日本に来たときに「こんな国だったのか」と思われぬように、私たちは思いやりの心を忘れないようにしたいです。自分のことだけで精一杯になりがちだった私に、久しぶりに「思いやり」の心を思い出させてくれた人々に本当に感謝です。(竹下 はるか)

どんなに生活が貧しくても、また裕福であっても、感じ方は人それぞれですが、今回タイに行って思ったことは、タイという国、特にカレン族の人達の生活の中には、愛が溢れているということです。どんなに貧しい生活をしていても、村の中にはいつも笑顔の村人が沢山いるのです。少数民族だからこそ、互いに助け合って、隣近所の人と家族のように仲良くなれるのだと思いました。(矢澤 杏咲)



朝礼に参加



折り紙を紹介



カレン族のコマ回しに挑戦

自然と共に生きているカレン族の人達にとっては、森は大切な友達であり、時には森を助けたりするなどして、森と人がひとつになっていることがわかりました。またカレン族の文化や伝統はとても大事に受け継がれていて、知恵のある生活を続けていました。それに比べ私は、日本人を続けているにもかかわらず、日本の伝統や文化を知らず、質問されてもはっきり返事ができずとても情けなくなりました。カレン族の人達は、自分の村に誇りを持ち、自分にも誇りを持ち、とても生き生きとした姿に心を打たれました。(森田 真菜)



キリスト教だということは聞いていたけど、ご飯を食べる前のお祈り以外は特にキリスト教を意識することはありませんでした。でも4日目の夜、カレン族の人との意見交換をした時からキリスト教を意識するようになりました。

「私たちとあなたがたが会えたのは、神様のお導きによります。この出会いに感謝したいです。」この言葉を聞いた時、私は涙が止まらなくなりました。神様、こんなに素敵な人々と出会えたこと、触れ合えたことに感謝します。何度も心の中で言いました。今まで都合のいいときだけ、神様に頼っていたけど、この日から私は神様という存在について、見方が変わりました。常に側にいてくれて良い方向に誘導して下さい、信じられる人だと思います。(内山 光)

笑顔で他の人を安心させることができる。人の優しさにたくさん触れ合えた。カレン族が私たちに接してくれたように、私も人々に接していきたい。そして、私たちが日本にいながら今できる事を探してやっていきたい。(山崎 薫)

山岳地帯には学校がほとんどありません。子供達は辛くても親から離れ寮で生活しなければいけません。私が寮の前を通ったとき、小学生にもならないような子が自分の服を洗濯していました。しかし、洗い方を知らないのでしょうか。ぐしゃぐしゃと洗い、ビチョビチョのまま一生懸命干していました。まだお母さんに甘えたい年頃の子が親と離れ寮で生活し、自分の身の周りの支度をしていると思うと胸が痛くなり、自分がどれだけ親に甘えていたか知らされました。(薩川 美咲)



英和生が寄付してくれた文房具を私たちが作った『愛のポシェット』に入れて、学校にいる子ども達にプレゼントしました。子どもたちは恥ずかしそうに私たちからプレゼントを受け取り、全員に渡し終えたと、すぐに柱に隠れて

中を開けて見ては、友達と見せ合いをしていました。その時の子ども達の表情は、とまどいから笑顔へ変わり、目がとても輝いて見えました。私達の筆箱の中には何十本という文房具があり、欲しい時に欲しいものが買えます。でもこの子達にとっては新しい宝物なんだな〜と、ポシェットを大事そうに抱える子ども達を見て、そう思いました。(森田 真菜)

向こうの校長先生が私たちを歓迎してくれ、たくさんの食事をごちそうになり帰ろうとした時のことです。私たちが残してしまった食事をティンやその仲間が食べていたのです。私はそれを見た瞬間、涙がとまりませんでした。日本では食べ残すという事に何の抵抗もなく、一日どれだけの残飯がでるのでしょうか。限られた水と食糧の中で暮らす人々は、日本には無い、本物の生きる力があると思います。(村松 彩野)



自給自足での生活の中、電気をあまり使わない、物を大切に何度も使うカレン族の生活ぶりは、今の日本に何かを呼びかけている様です。子どもたちが遊ぶテレゲーム、パソコン、携帯電話。「本当に必要ですか?」「何のために」「楽しいから?」「それで?」是非聞いてみたい気分になりました。かつて私がそうだったように、何だかばからしくてなりません。日本に帰ってきて、蛇口を開くと当たり前の様に流れる水やボタンを押すだけのテレビを使うと申し訳ない気分がいっぱいになりました。あたり前では、なかったのです。この暮らしは、幸せで当たり前。命があつて当たり前という考えから、日常を幸せに思い生活していくことが大切なんだと改めて思いました。(境田 紘子)